村田良平著「ＯＥＣＤ(経済協力開発機構)－世界最大のシンクタンク」を読む

－ＯＥＣＤをもっとよく知り、もっともっと活用しよう－

・事実上サミットの主要テーマとなると予想される経済社会問題は、毎年ＯＥＣＤの考え方が反映されるよう(ＯＥＣＤの)閣僚理事会で各国が意見を述べるという慣行が出来上がって今日に至っている。従ってＯＥＣＤ閣僚理事会は毎年サミットの行われる数週間前に開催されるのである。(P.38～39)

ＯＥＣＤは、日本においては「知る人ぞ知る」国際機構にとどまり続けたが、この機構で行われた作業、その成果としての報告書、そして事務局が作成する多岐にわたる統計は、国会における立法、各省庁の政策立案、大学や研究機関における研究活動にとり、従来からも欠かせないものであった。

私は本書の副題で、ＯＥＣＤを「世界最大のシンクタンク」と形容した。防衛・軍事に関するものは別として、広義の経済、社会問題に取り組んでいるシンクタンクとしてはＯＥＣＤは最大である。その場合、私が念頭に置いているのは、ＯＥＣＤに常勤する約７００名の専門職員の数だけではない。毎年ＯＥＣＤの諸委員会の会合に出席するため、加盟国の本国政府からパリへ出張する人の数は２万名以上、加えて加盟国はパリにＯＥＣＤ代表部を設置しているから、その職員ももちろん討議に参加する。しかも多くの場合、ある会合で討議、検討が行われれば、それで作業が終わるのではなく、参加者はその会合の結果を持ち帰って、本国にいる専門家の意見を聴取し、次回会合に備える。つまり、事務局員の作業に加え、右に述べたような各国の参加者がインプットする事実、情報、分析、構想が合体して、ＯＥＣＤの結論が出され、その多くは出版物となり書籍、ＣＤ－ＲＯＭとして公表されるのである。これらは権威の高い優れた内容のものが多い。

これが私が、ＯＥＣＤを世界最大のシンクタンクと形容した理由である。

世界に国際機構は多いが、ＯＥＣＤの間口の広さは格別であり、この点でＯＥＣＤに比し得る機関は、政府レベルでも民間レベルでも世界に一つもないといえよう。(P.197～198)

村田良平著「ＯＥＣＤ(経済協力開発機構)－世界最大のシンクタンク」を読む
中公新書、中央公論新社 2000 年 1 月 25 日刊
－ 2006 年 9 月 9 日記－